

28 中根東里を佐野に招聘した医師・金束信甫(思順)著の 新出史料『反治解』について

松木 宣嘉

四国医療専門学校鍼灸マッサージ・鍼灸学科

【緒言】 佐野の植野村の生まれで、享保20(1735)年に陽明学者の中根東里を植野村に招聘した医師、金束信甫(思順)は三冊の著作が知られている。一冊目は内藤記念くすり博物館大同薬室文庫所蔵『刺法要訣』(明和元(1764)年序)で、二冊目は武田科学振興財団杏雨書屋大塚修琴堂文庫所蔵『経治方』(明和7(1770)年序)、三冊目は同じく杏雨書屋大塚修琴堂文庫所蔵『候腹師説』(明和8(1771)年序)である。また、『候腹師説』の内容は内藤記念くすり博物館大同薬室文庫所蔵『先師百邪伝』(成年不詳)の前半に収載される「手足六経邪氣之篇」と同様であることが知られている。さらに『刺法要訣』および『先師百邪伝』には、信甫(思順)と同郷の医師である服部甫庵の蔵書印があることが知られている。以上のことから金束信甫(思順)と服部甫庵の関係を知るべく『甫庵蔵書目録』を調査することとした。

【方法】 武田科学振興財団杏雨書屋所蔵『甫庵蔵書目録』(乾5715)について文献調査をおこなった。

【結果】 五十一葉表に「一小兒三略^{七函入} 一刺法要訣^{六函} 一反治解^{七函入} 一鍼刺十七病^{六函} 一先師百邪伝^{六函} 一診家枢要^{九函入} 一刪補陰輸通考^{六函} 一産前後之書 以上八部金束氏所蔵ナリ」との記載があることが判明した。この記載から、上述した甫庵蔵書印のある二冊は金束家旧蔵書であることが分かる。このうち『反治解』『鍼刺十七病』『産前後之書』は内藤記念くすり博物館大同薬室文庫に、『刪補陰輸通考』は武田科学振興財団杏雨書屋にそれぞれ所蔵が新たに確認でき、いずれにも服部甫庵の蔵書印が押されていた。特に『反治解』については序文から明和9(1772)に信甫(思順)によって書かれたものであることが確認でき、信甫(思順)著の新出史料であることが明らかになった。

【考察】 『反治解』は三十一葉からなる書で、内容は反治についての解説が書かれている。反治については本書の冒頭に「寒薬ヲ用テ寒病ヲ治シ熱薬ヲ用テ熱病ヲ治スルノ類其病ニ従フノ謂也。亦従治トモ従攻トモ云。」とある。本書には「七十二方傳ノ三承氣大柴胡等ノ邪氣ヲ識得スレバ寒候明曉ナルベキナリ」と書かれた箇所があり、この七十二方とは佐野市東光寺の金束信甫碑文に「七十二方候腹之術尽獲宮先生秘訣」とあることから宮本春仙伝の内容であることが伺える。宮本春仙は『水府系纂』に登場する水戸の医師で、『経穴纂要』の序文から多紀元孝の師であることが知られており、『參攷揆穴編』に登場する中島元春もその門弟である。『宮本氏経絡之書』、『宮本家十四経絡』、『宮本一流経絡書』が伝わっており、『灸穴秘蘊』にもその名前が登場する。この七十二方については『候腹師説』で言及してあるが、七十二方の腹図を妄信することを戒めて公開していない。そのため七十二方については現伝史料では不明な点が多いため、本書の内容からその一部を知ることが出来る。また、本文中には医案が含まれており、その中で「問^レ之^レ先師^ニ師曰^クとあるため、信甫(思順)と師である宮本春仙とのやり取りを知ることが出来る。また、「逆^レ而^レ從^レ之^ニ從^レ而^レ逆^レ之^ニアリ此^レ予ガ所謂圓轉活變ナリ」と書かれた箇所があり、信甫(思順)の著作に散見される自身の独創的な医学理論を紐解く史料となる箇所が見受けられる。巻末には「不可攻撃之機」「不可補益之候」が書かれ、その中に「合谷太衝脱陷者」「合谷太衝充滿按而痛者」との記載がある。師の宮本春仙は経絡経穴学を得意としていた事が知られており、この記載からも信甫(思順)がその特徴を継承していることが伺える。これらの事から宮本春仙の具体的な臨床の実態は本書を含め金束信甫(思順)の著作に色濃く残っていると考えられる。

【結語】 本書は金束信甫(思順)の新出史料であり、師である宮本春仙の医学を知ることの出来る貴重な史料である。

本研究は、2020年度「杏雨書屋研究助成」の助成を受けたものである。